

「ぶらり日本館」 第2号

茨城近代建築の父・駒杵謹治 — 没後100周年に寄せて — (若き天才建築家)

平成31年2月15日

皆さんは、茨城県で大きな業績を残した明治大正期の建築家「駒杵謹治」をご存じですか。彼は、本県職員としての在職が2年余りであったものの、多くの学校等の建築に関わり本県に本格的な洋風建築を伝えた人物です。

私は土浦一高在任中、校地内の旧茨城県立土浦中学校本館（国指定重要文化財）に一目惚れして、その優美で気品あるこの建物の虜になってしまいました。彼の代表的な作品であるこの建物の建築様式は、イギリスからアメリカを経由して日本に伝わったゴシック・リヴァイヴァル様式をベースにした木造平屋作りです。正面玄関の三連尖頭アーチに切妻破風きりづまはふを載せた玄関ポーチを設け、その両側に尖塔を構え、東西両翼端に切妻破風、正面東西両翼屋根面に各3個のドーマー窓、そして連続する縦長窓などたくさんの垂直体を用いています。まさにゴシック様式を見事にアレンジして壮麗なデザインを創り上げています。また、札幌市時計台のように外壁にドイツ下見板張りの工法を採用するなどアメリカ・コロニアル様式も加味しています。

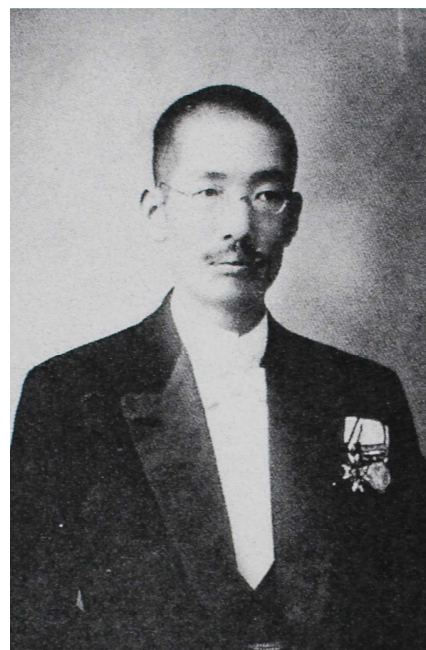
駒杵は、明治10年(1877)に旧新庄藩士の四男二女の末子として羽前国最上郡新庄町しんじょう（現山形県新庄市）に生まれ、山形県尋常中学校（現山形東高校）から仙台市の第二高等学校（現東北大学）へ進み、さらに東京帝国大学工科大学建築学科（現東京大学工学部建築学科）に入学しました。大学の同期生には、大熊喜邦（国会議事堂設計）や佐藤功一（早稲田大学大隈記念講堂設計）などその後の日本建築界の重鎮として活躍した錚々たる面々がいました。この中で切磋琢磨しながら西欧の先進建築を学んだものと思われま



旧土浦中学校本館

そして茨城県知事の河野忠三に招聘され、明治35年(1902)12月に辰野金吾校長（日本銀行本店・東京駅設計）からの卒業証書を手にして25歳の若さで茨城県に奉職しました。正規の卒業よりも7ヶ月も早い卒業でした。

赴任してわずか2年3ヶ月の在職中に、



駒杵謹治

新進気鋭の県技師として昼夜を問わず精力的に設計・監理に当たりました。この間、旧土浦中学校本館、旧太田中学校講堂（現太田一高）、旧商業学校本館（現水戸商高）、旧龍ヶ崎中学校講堂（現竜ヶ崎一高）、旧水海道中学校講堂（現水海道一高）、旧水戸高等女学校講堂（現水戸二高）、旧県立図書館本館、旧麻生警察署、旧下館警察署の本格的洋風建築を手がけました。短期間に9件の建築を成し遂げたことは驚異的な業績といえます。それらの作品は、明治初期に流行した擬洋風建築(文明開化様式)とは違い高度な学識に裏付けられた正統洋風建築であり、その地域性や校風に配慮しながらゴシック、ロココ、バロック、コロニアルなど様々な西洋様式を取り入れた独創的な建物を造り上げています。また、彼の採用した横板張りの木造外壁などコロニアル様式は、のちの本県住宅建築に大きな影響を与えたものと思われます。彼の建築物は、茨城県の建築史上、極めて貴重なものであり、茨城に残した近代建築の礎は、今も色あせることなく燦然と輝き続けています。



旧太田中学校講堂

駒杵は、水戸市に居を構え妻をめとり充実した生活を送っていたようですが、その後、茨城県を離れ内務省や海軍省の技師として伊勢神宮遷宮造替や旧長崎県立佐世保中学校本館建築などに関わったようです。茨城県を去ってからの詳しい足取りはよく分かっていませんが、のち恩師辰野に倣って野に下り福岡市に設計事務所ぞうたいを開設しています。独立後の活躍が大いに期待されるころでしたが、大正8年(1919)2月27日、肺結核により福岡市の自宅で42歳という短い生涯を閉じました。今は、故郷新庄市の桂嶽寺に静かに眠っています。

なぜ、東京帝国大学卒の建築家が中央官庁ではなく、また出身県でもない茨城県に奉職したのかは謎です。駒杵家の先祖は、かつて常陸国鉾田地方（現鉾田市）の駒木根一族であり、江戸期初頭に主君佐竹氏の秋田への移封に伴って新庄へ移ったとされることから、茨城県に対する何か深い思い入れがあったのかもしれません。また、なぜ2年余りで茨城県を去ったのかも謎です。彼を招聘した河野県知事の他県への転任に伴い後ろ盾を失ったことによるものかもしれません。彼の経歴や功績については不明なことが多いことから、このまま歴史に埋もれさせないよう今後のさらなる研究の進展を期待します。

平成31年(2019)2月の命日で、ちょうど没後100周年となります。県民の皆さんには、これを機に茨城県の建築に多大な貢献をした駒杵謹治を称えていただければ幸いです。

前茨城県立土浦第一高等学校 校長(第33代) 横島義昭